

Alternative Systems Study Bulletin

第13巻第5号

(2005年12月15日)

存在の形而上学的、神学的構成

信用資本主義論序説

「関係主義者」の実体論 実体論の研究(第4回)

現場から

後記

編集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>

メール kyw04500@nifty.ne.jp

会費 正会員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会
(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

存在の形而上学的、神学的構成 信用資本主義論序説（第一回）

はじめに

信用資本主義論というテーマで書き始めました。問題意識としては、金融資本と信用資本との違いを明らかにしようというものでした。その内容は、資本市場から見てみると双方の運動法則が違うということに注目し、金融は関係の両極を中心に見ているが、信用は中間の関係そのものを見なければならない野ではないか、というものでした。そして、ライプニッツのモノダ論が適用できるかどうか考えてみたのです。

つまり金融資本論は、ヒルファーディングやレーニンのように、銀行と産業の癒着というように個別企業の連合を主体として設定していますが、これに対して信用資本論は、資本市場という信用制度そのものを主体としているのではないのか、ということです。だから個別企業は極であり、この主体の反射という限りで信用資本論の範疇をなすのではなからうか。

こんな方向で書き始めましたが、商品論のところまでこれまでの提起（文化知）を超えて、存在の形而上学的、神学的構成に気づき、これについて長々と書きました。文化知は社会関係の解明の方法でしたが、いざ解読してみると、存在そのものが形而上学的、神学的構成を取っていることが判明してきたのです。今日の人々の自己神格化の要因が、この存在の特有の構成にあり、自己神格化の解毒も、この存在の様式を変えていくことから始まるのではないのでしょうか。

これを書くにあたっては新しくはじめた資本論カフェでの資本論の読み合わせに参加させてもらって、沢山の刺激をいただいたことがきっかけとなっています。今回は貨幣までしか進んでいません。資本市場論は今後の課題です。

第1章 商品価値の形而上学的、神学的構成

1) ライプニッツの形而上学

ライプニッツを関係の極を解明した哲学者と捉え、モノダ論を極性の理論とみなすと関係の解明にとって非常に有力な手がかりがえられます。ライプニッツは無数の関係を取り結んでいる単純実体としてのモノダに派生的力と原始的力とを認めてこれを区別しています。ライプニッツによれば、普通の科学が対象としているのは派生的力で、これに対して原始的力は場所的移動や量的規定を受けるものではなく、実体を実

体として成り立たせている基本的な構成だと考えられているのです。

このように考えるとモノダが持つ原始的力は根源的活動性であり、運動するものというよりも、表出するもので、表出と捉えることでモノダは一が多を表出するという構成を持ったものとして措定されているのです。

原始的力は関係の極をなしている単純実体モノダの表出作用によって顕わになりますが、この力は関係そのものに内在しています。たとえば精神も自我と対象との関係であって単純実体としてあるような存在なのです。このように考えると商品相互の関係の内にある商品価値の形而上学的で神学的な解明が問われてくるのではないのでしょうか。

2) 商品価値の実体と形態

商品価値とは私的諸労働の産物が社会的な関係に入るときに受け取る形態に価値対象性を宿らせるような形而上学的で神学的な存在であるとマルクスは考えました。商品の物本性について述べたところでマルクスは「商品は、一見、自明平凡なものに見える。商品の分析は、商品とは非常にへんてこなもので形而上学的小理屈や神学的な意地悪さでいっぱいなものだということを示す。」（『資本論』第1巻、原典、85頁）と述べています。ここで言う形而上学や神学とは、あれこれの哲学者や神学者の説を指すのではなく、超感覚的な存在に特有な構成という意味でしょう。

超感覚的な存在の一番身近なものは関係であり、関係の内実は超感覚的な質から成り、思考によってしか把握できません。ところがこの関係一般は感覚的に把握できる関係の極によって構成されており、この事で同時に関係の内実を隠蔽しているのです。関係のこのような構成を踏まえれば、関係の簡単な形態を形而上学に習って単純実体と捉えることが出来ます。実体概念は従来広松渉によって関係概念に対立させられてきましたが、本当のところは実体という概念自体が関係概念の解明のキーワードなのです。

マルクスが「形而上学的小理屈」と呼んだ事柄を考えてみましょう。商品価値は単純実体としては原始的力を持ち、関係の極としてある感覚的に把握できる商品の使用価値という一性に、価値という超感覚的な他性を表出させて、関係の極としてある使用価値一に、多を宿らせます。ここで一なるものが多に化けるという「神学的意地悪さ」が仕掛けられています。

関係の極が関係によって一＝多とされている事態をマルクスは形態規定と名づけました。極としてある単純実体についての解明はライプニッツがモノダ論で手がけており、先に見たように、関係の極としてある単純実体は感覚的に把握できるものとして

は力学などで捉えられる質量を持つ存在ですが、これは関係を表出するものではなくて、逆に関係の存在を隠蔽する派生的力でした。この力とは区別された原始的力が超感覚的な存在の概念から導き出されなくてはならないのです。この原始的力についてのイメージはたとえば思考力といったものを考えるといいでしょう。思考力には力学的力はありませんが、しかしそれは思考物を表出していくのです。

価値対象性とは、このような形而上学的で神学的な構成をしています。関係の極がなければ関係は成立しませんが、極が与えられると極は関係という超感覚的な存在を表出する鏡となり、労働生産物の価値対象性とはこのような存在構成の中にあるのです。価値対象性としてある労働生産物は商品ですが、商品が使用価値と価値との二重物であるというのもこの意味での事だったのです。つまり使用価値としてある関係の極が、その質のまま別質である価値を表出しているのです。この価値の表出のされ方を商品に則して解明したものが価値形態論だったのです。

3) 簡単な価値形態の形而上学的、神学的構成

価値形態の秘密とは何かという問いに対しては、「商品の価値は使用価値という反対物で表示される」ということですが、この事自体が形而上学的で神学的な構成をしています。『資本論』初版の価値形態論に則して、簡単な価値形態の構成をたどってみましょう。

「リンネルは、一つの使用価値すなわち有用物の姿で、この世に登場する。それゆえ、その糊でごはごはした物体性すなわち自然形態は、その価値形態ではなくて、価値形態の正反対物なのである。それはそれ自身の価値存在を、さしあたりはまず、自分に等しい物としての他の一つの商品、上着に関連することによって、示すのである。もしリンネルがそれ自身価値でないならば、リンネルは価値としての・自分に等しい物としての・上着に関連することはできないであろう。質的にはリンネルは自分に上着を等値するのであるが、そうするのは、リンネルが、同種の人間労働の・すなわちそれ自身の価値実体の・対象化としての上着に関連することによってである。」(『マルクス経済学レキシコン』11巻、23頁)

ここでリンネルが別の使用価値である上着と等値されている関係が想定されて、その内容が解析されていますが、そこで起きている事態について、マルクスはリンネルが自分に等しいものとしての上着というように、リンネルに上着を自分に同等化する力を認めていることです。それも使用価値を捨象しての同等化ではなくて使用価値としての異質性を残したままでの同等化です。通常異なるものの同等化は思考の働きによりますが、その場合は異質性を捨象し同一性を双方のものの中に探っていく、い

わゆる思惟抽象の追求となります。ところが現実の関係における同等化は、関係そのものうちにある原始的力とも呼ぶべき同等化作用により、異質性を排除せず、異質な物が同一的なものの化体とされることによる、とマルクスは見ているのです。これが価値概念の持つ力として、形而上学的構成をなし、また、化体という神学的発想を要請しているのです。ではこの力はどのように作用するのでしょうか。マルクスはリンネルの価値が上着というその自然形態においてあらわされている事について述べたあと、次のように解析しています。

「価値としては、リンネルはただ労働だけから成っており、透明に結晶した労働の凝固体をなしている。ところが、現実にはこの結晶は非常に濁っている。この結晶体のなかに労働が発見されるかぎりでは—そして必ずしもどの商品体も労働の痕跡を示しているわけではない—、それは無区別な人間的労働ではなく、織布、紡績、等々であって、これらの労働も決して商品の唯一の実体をなしているのではなく、むしろもろもろの自然素材と混和されているのである。リンネルを人間的労働の単に物的な表現として把握するためには、それを現実に物にしているところのすべてのものを度外視しなければならない。それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容も持たない人間的労働の対象性は、必然的に抽象的な対象性であり、ひとつの思考産物である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。ところが、諸商品は諸物象である。諸商品がそれであるところのもの、諸商品は物象的にそういうものでなければならない。言い換えれば、諸商品は、それらがなんであるかを、それら自身の物象的な諸関連のなかで示さねばならない。リンネルの生産においては一定量の人間労働力が支出されてしまった。リンネルの価値は、このように支出された労働の単に対象的な反射なのであるが、しかし、その価値はリンネルの物体において反射されているのではない。その価値は、上着にたいするリンネルの価値関係によって、顕現するのであり、感覚的な表現を得るのである。リンネルが価値としての上着を自分に等値しながら、他方同時に、自分を使用対象としての上着から区別する、ということによって、上着はリンネル—物体に対立するリンネル—価値の現象形態となり、リンネルの自然形態とは区別されるリンネルの価値形態となるのである。」(同書、27頁)

ここでマルクスがリンネルが頭脳織物にされていると見なしているところに注目しましょう。形而上学によれば思考作用は人間にではなく実体のほうにあります。リンネルと上着の価値形態という、価値実体の構成において、リンネルが頭脳織物とされるということこそが価値形態の形而上学的構成にほかなりません。

ではリンネルが頭脳織物とされるのはどのような関係によるのでしょうか。それはリンネルが上着を自分に同等化している、という事態の内にあり、この事態はリンネ

ルを生産した労働が、上着に反射されているという形而上学的構成をそこに承認することによって判明するのです。リンネルが上着を自分に同等化している事態をリンネルに対象化されている労働が上着に反射されていると読む事はそんなに難しい事ではなく、実は人々の社会関係のうちに類例を見出しうるものです。たとえば私が対面しているあなたの目の前で破廉恥な行為をした時に、あなたがしかめ面をするという事態を想定してみましょう。この場合私の行為があなたに反射され、あなたは具体的・個別的な人間でありながら、抽象的な行為の体系としてある倫理の化身とされているのです。この関係においては倫理という抽象的で超感性的なものが、私とあなたとの倫理的関係において、私とあなたという異質性を排除せずあなたを倫理の化身とし、それが鏡となって私の行為があなたに反射されたときのあなたの表情を決定しているのです。この場合のあなたはまさに形而上学的で神学的な構成を担っているのです。

関係に内在する原始的力はこのように、極と極との反射を通して表出してくるのですが、その表出は超感覚的であるために、具体的なものそれ自体を関係の内にある同等な質の化身とするという仕方になされているのです。

第2章 価値形態の形而上学的、神学的構成

1) 価値形態論の帰結

マルクスは『資本論』初版価値形態論の末尾に自らの価値形態の解明をまとめて「観念的に表現すれば、価値形態は価値概念から発していることを論証するということがあったのである」と書きとめています。ここでマルクスが「概念」と呼んでいるのは自ら限定しているように観念論の立場からのものですから、精神のことです。価値の精神から価値形態が生じてくる、という事は精神を単純実体と捉え、これに原始的力を見る形而上学立場に他なりません。先のまとめの言葉は価値形態の解明には形而上学立場が有効である事をマルクスが示唆していることは明らかです。

ここでは価値形態の完成した姿態である貨幣形態に則して形而上学的、神学的解明を試みてみましょう。結論から言えば、この作業は労働生産物の商品化の裏にある商品からの貨幣の生成を跡づけることであり、超感覚的な関係が人々の無意識を支配しているということを示すことです。

たとえば、いま仮に私が市場に私の労働生産物を値付けして売り出せば、私の労働生産物は商品になります。同時にこの行為によって、私はそうと知らずに貨幣を生成する共同行為に参加しています。というのも商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって商品から貨幣が生成されます。商品の「意志」を無意識の内に人

格が宿して行動するということが物象化という事の根底にあり、物象化とは物象による人格の意思支配のことに他ならないのです。そして、商品や貨幣や資本の「意志」を人々は自分自身の自発的な意志だと思いこんでいます。これこそが価値形態の形而上学的で神学的な構成の帰結に他なりません。このような帰結がどのようにして生じるのでしょうか。

マルクスは簡単な価値形態に価値形態のすべての秘密が宿約して含まれていると述べています。それについては既に見てきました。ここでは価値形態の発展が素材にされなければなりません。

2) 価値形態の発展

リンネルと上着という二つの商品の関係が簡単な価値形態(第一形態)でした。マルクスはこの形態を分析する際に「すべての価値形態の秘密はこの簡単な価値形態のうちにひそんでいるにちがいない」(初版原典、764頁)と述べています。この関係はリンネルが多くの商品と関係する展開された価値形態(第二形態)に含まれていたものですから、次にはこの第二形態が問題となります。

リンネルが多くの商品と関係している第二形態はリンネルの価値を多くの商品の使用価値で表示しています。それでマルクスは「ここではリンネルの価値がはじめて真に価値として、すなわち人間労働一般の結晶として示されている」(初版原典、25頁)と述べています。

次のこの第二形態を逆に転倒すると一般的な価値形態(第三形態)がえられます。ここでは他のすべての商品がリンネルという単一の商品で自分を価値として表示しているのですが、そのことは他のすべての商品がリンネルを仲立ちにしてそれぞれが価値の担い手という同等なものであることを表示していることとなります。

普通はこの第三形態が貨幣形態に発展すると説かれます。リンネルの位置に貨幣にふさわしい貴金属がおかれ、それが金に固定化されることでもって貨幣形態の成立が説かれるのです。『資本論』現行版はそうになっているのですがしかし初版では別様の展開がなされています。そしてこちらのほうが形而上学的で神学的な解明となっているのです。

初版では一般的価値形態のあとに第四形態が置かれ、これを踏まえて交換過程論が続くというようになっています。第四形態とはすべての商品が一般的価値形態の等価商品の位置につこうとする場合を想定したもので、この場合は個々の商品の「思い」とは別にすべての商品が第二形態をもって相互に無関係に並存するという島宇宙のような構成になってしまいます。ここでは第三形態に見られる個々の商品のあいだに形

成された一般的な関係は断ち切れ、貨幣も発生しようがありません。

商品からの貨幣の生成のこの困難を解決するものが交換過程論でした。もともと商品は形而上学的な原始的力をもった単純実体であり、使用価値を価値の化身としてしまうような神学的な存在でした。この力は絶えず表出しており人間を誘惑しようとしています。ところで、商品所有者たち全員が自分の商品でなんでも買えれば便利ですからそのように行動すると第四形態が生まれてしまい、何物も買えなくなってしまう。それで人間は自分の意志を捨てて商品の原始的力の表出に自分たちの意志を宿すことを学びます。第三形態は自分たちの商品を共通で単一の商品に対して売り出すということで成立しますが、これは商品所有者たちの無意識の内での本能的な共同行為として行われます。そしてこの事態こそが、価値の概念から貨幣(価値形態の完成体)が生まれるということに他なりません。そしてこの形而上学的構成は同時に商品の「意志」が神の「意志」のように人間に宿るといふ、神学的構図でもありました。

第3章 貨幣の形而上学的、神学的構成

i) 貨幣の価値尺度機能

商品からの貨幣生成論は形而上学的、神学的構成をもっており、商品という物象による人格の意志支配の帰結でした。それは商品に自分の意志を宿した商品所有者たちが、自分たちの商品の価値を金という単一の商品で表現するという無意識の内での本能的な共同行為を成立させるのでした。そしてこの共同行為は、商品所有者たちが、商品に価格をつけるという日常の行為の裏側で無自覚的になされ、こうして日々商品金を貨幣として創りなおしているのです。このときに貨幣としての金は商品の価値を量る価値尺度としての機能を発揮しています。

「諸商品が金において自分たちの一般的な相対的な価値表現を自分たちに与えることによって、金は諸商品に対立して諸価値の尺度として機能する。」(原典 55 頁)

貨幣商品金の価値尺度機能については色々論争があり、とくに金ドル交換停止以降、金廃貨論が登場して、金はもはや価値尺度機能を果たしていないということが、金が流通手段として交換過程に登場していないことを論拠に主張されました。でも価値尺度機能こそは、形而上学的、神学的構成の頂点をなす意地悪な構成をしているのです。

「価格の確定されている商品は二重の形態をもっている、すなわち実在的な形態と表象されたまたは観念的な形態とである。その商品の現実の姿は、使用対象の姿、具体的な有用労働の生産物の姿、たとえば鉄である。その価値姿態、すなわち、一定分量の同種の人間的労働の物質化としてのその現象形態は、その価格であり、ある分量

の金である。しかし、金は鉄とは違う物であって、鉄は、その価格においては、自分とは別な物であるとはいえ自分と価値の等しい物としての金に、自分自身を連関させるのである。商品の価格または貨幣形態は、ただこのような等値しているという連関のうちのみ、つまりいわばただその商品の頭のなかにも、存在するのであって、商品の所有者は、商品の価格を外界にたいして表示するためには、自分の舌を商品の頭に突っ込むか、または、商品に紙片をぶらさげるかしなければならないのである。それだから、商品の価値の形態は、商品の使用価値の手につかめる実在的な物体形態とは区別される、表象された観念的な貨幣形態なのである。このように諸商品はそれらの価値をただ観念的に貨幣において表現するだけだから、諸商品はまたそれらの価値を、やはりただ表象されたまたは観念的な貨幣で表現するのである。それゆえ、諸価値の尺度は、ただ、表象された観念的な貨幣としての貨幣なのである。どの商品所有者でも知っているように、彼が諸商品を金で評価するときには、すなわち、商品価値に商品価格の形態を与えるときには、彼は少しも現実の金を使用しはしないのである。」(レキシコン 11 巻、265—267 頁)

価値尺度としての金は観念的なもの(尺度する際に現実の金は必要ないということ)であることは一般に認められていますが、マルクスはこの観念性について二つの意味を与えています。一つは金による商品価値の表示が観念的であるということであり、もう一つは貨幣金自体は存在しなくてもよい、ということでした。従来後者の観念性については理解されてきましたが、前者の観念性については理解が届いてはいませんでした。いまこの意地悪な構成について解き明かす時が来ました。

マルクスは商品鉄の価格についてこれを二重の存在だと見ています。一つは現実の使用価値としての鉄と金ですが、もう一つは観念的な形態で、価値尺度としての金はこの観念的な形態の方に属しているのです。そしてこの観念的な形態において、商品の貨幣形態は商品の「思考」の帰結としてあり、商品は頭脳のような役割を果たしている人間はそれに舌を提供することで価格を言語化すればいい、というのです。

物としての商品が「思考」し人間はそれに舌を提供するだけでいい、という現実こそ商品の形而上学的、神学的構成の極地をなしています。異なる使用価値が労働価値として相互に等置されているという何気ない関係の内にはこのような観念的な構成が認められるのでした。(続く)

「関係主義者」の実体論 実体論の研究（第4回）

第1章 廣松渉の「関係主義」について

1) 実体概念の問題点

この間、スピノザ研究会で、スピノザやライプニッツの形而上学を取り上げてきましたが、そこで明らかとなったのは、「関係主義」を提起している廣松渉の「実体主義」論についての疑惑でした。それで実体論研究の締めくくりとして、廣松の「実体主義」理解を検討してみましょう。

廣松は自らの「関係主義」を「ヨーロッパに伝統的な『実体主義』的存在観」（『物象化論の構図』、45頁）を超越する新たな哲学的見地と考えていて、「関係主義」の観点からの諸関係の解明にその生涯をささげてきました。しかし彼が反発している「実体主義」なるものはどうも彼の勝手な思考産物で、ヨーロッパに伝統的な実体観を踏まえたものではないように思います。その結果、関係の解明にも成功してないように思えるのです。

廣松によれば「実体主義」とは、次のように述べられています。

「『関係』について言えば、ヨーロッパ哲学の伝統的な思念によれば、まずは『実体』（=自存体、すなわち、他との関係なしにもそれ自身で存在するもの）が第一次的に在って、それら実体どうしのあいだに、関係が二次的に成立するものと考えられてきた。」（『廣松渉コレクション』第一巻、118から119頁）

ヨーロッパ哲学の伝統的な思念というのは形而上学のことでしょうか。廣松は「スピノザ流の実体主義」（『物象化論の構図』、246頁）と書いてますから、スピノザの実体論が念頭に置かれているようです。ところがスピノザは廣松が描いたような実体論を展開したわけではありません。スピノザの『エチカ』を紐解いてみましょう。

「三 実体によって私は、それ自らのなかに存在し、しかも、それ自らで理解されるものなることを理解する。つまり、その概念は、他の事物の概念から形成される必要のあるそういう他の事物の概念を必要としないようなもの、のことである。」（『世界の大思想』第9巻、7頁）

スピノザの実体は概念的なもののことで、廣松が「他との関係なしにもそれ自身で存在するもの」というように理解した関係の担い手としての個的事物の事を指しているわけではありません。スピノザは単に実体という概念は、他の事物の概念に依存しないといっているだけで、廣松が理解しているような、「他との関係なしにもそれ自身で存在するもの」といったものを想定しているわけではありません。だからスピノザ

にとっての実体とは自存している概念のことですから、とどのつまりは神=自然のこととされます。

「六 神によって私は、絶対に無限な有、すなわち、その一つ一つが永遠かつ無限な本質を現しているところの無限な諸属性を通じて確立している実体を、理解する。」（7頁）

スピノザの実体はまずは神=自然ですから、これは関係の担い手としてあるようなものではなく、まさしく諸関係の中で変わらないものと捉えられており、概念的なものであって、関係そのものについての把握でした。

そうだとしたら廣松のように「“実体”に関しても、それをしかるべくして生ずる物象化的錯認の一種と見なし、“実体”とは関係の規定の“結節”とも謂わるべきものと主張する」（『コレクション』、123頁）という叙述にあるような、実体をあくまでも関係の項そのものとするのは、ヨーロッパ哲学の伝統を踏まえたものとはいえません。個性の哲学者と見なされているライプニッツのモナド=単純実体論にしても、具体的な個物が実体と見なされているわけではなく、個物の精神性、その概念が実体と見なされているわけですから。したがって、個物の精神性・概念性としてある実体を「物象化的錯認」と見なすことは、たとえばスピノザの神=自然をそう見なすというたわごとになってしまうのです。そしてこのような実体観に基づいて関係を論じているのですが、それは次のようなものとなっています。

「関係性とは『相待的依他起生性』であり、関係とは『一者-他者』の相互的区別化的統一態であって、しかも、一者と他者との『あいだ』に互いに他者が自分の『かくある』の存在条件をなすごとき相待性が存立することの謂いである。このように誌すと、『一者』と『他者』という関係『項』が『関係』に先立って存在するかのように誤解される惧れなしとしない。が、両項は互いに他項との関係によって自己の存在を得ているのであるから、関係に先立って独立自存するわけではない」（『存在と意味』、479頁）

ここで廣松が関係のイメージとして述べている「相互的区別化的統一態」こそスピノザの実体ではないでしょうか。廣松が考えているような、関係の項についてはスピノザやライプニッツにとっては移ろい逝くもので、そんな物を実体としているわけではありません。モナドにしても関係の項としてある極の極性に実体を見ていて、この極性は精神的なものであり、関係性として捉まれています。それはともかく廣松は自らの実体観を自ら退けようとしているのですが、その結果廣松の関係主義とは、かの実体観批判に尽きてしまうのです。というのも関係の項の二重性を見抜くことが関係の考察にあっては前提になり、そして二重性は廣松が退ける「実体」としてある項

と、超感性的な精神的・概念的な実体（これがヨーロッパ哲学の伝統的実体観）という二つの要素からなるのですが、かの「実体」を退けることで、項としてある物の物質性を抹消させてしまい、その結果、関係自体を現実には消失させてしまっているのですね。つまり廣松はそうと知らずに項の極性における感性的な物を捨象した上で関係論を構築しようとしていて、その結果関係論のほうは観念的なものとしてしか規定し得ないものを感性的なものとして認識しようという、無駄な試みを行うことになってしまっているのです。

2) 資本論解釈の問題点

廣松の商品論を中心とする資本論解釈の問題点については都度指摘してきました。今回は、恐らく最後の資本論解釈だと思われる『資本論を物象化論を視軸にして読む』（岩波書店）へのコメントを試みてみます。いま読み直してみますと、廣松はこの本ですごく大胆な解釈をしています。あらかじめ要旨を紹介しておきますとマルクスが『資本論』の第1章、第1節から第3節で展開している商品についての分析を、物象化的錯視に沿っての記述だとみなしているのです。したがってこれらの内容についてマルクスの学理的な見地からはそのまま承認できないものだというのです。廣松の解釈を引用しましょう。

「それでは、マルクスがこれまで論じてきたこと、つまり、われわれがこれまで辿ってきた首章の第一・第二・第三節での所論は、一体どうなるのか？彼は、勿論、これまでの議論が単なる妄想であったとって全面的に撤回するわけではない。しかし、これまでの暫定的な分析で見た相は『商品生産の諸関係の内に囚われている人々』に映ずる規定性を推し詰めたものであって、マルクス自身の学理的な見地からすれば、そのまま承認されるものではない。」(48頁)

廣松にあっては、例えば価値形態論で暴かれた価値形態の秘密や謎は商品生産の諸関係の内に囚われている当事者たちの視座に即する限りでの規定性で「マルクス固有の見地からすればそれは一種独特の『錯認（取り違い）』であることを批判的に視的さるべき与件をなす」(48頁)と捉えられているのです。このように考えればマルクスの固有の見地は、第4節の商品の物神的性格とその秘密、で述べられているということになります。しかし、価値形態論での価値形態の秘密と謎の解明なしに、商品の物神性の批判は提起しようがないでしょう。それはともかく廣松の言うところをもう少し聞いてみましょう。廣松はまず『資本論』から次の文章を引用します。

「ところが、まさにこの商品世界の既成的形態—貨幣形態—が、私的所労働の社会的性格を、したがって、私的労働者たちの社会的関係を、物象的に隠蔽してしまう。

もしも私が、上衣や長靴やその他の物どもが人間の抽象的労働の一般的体化物としてのリンネルに関連づけられるのだ、という言い方をするとすれば、この表現の錯乱は一目で判る。しかるに、上衣や長靴などの生産者たちが、これらの商品を一般的等価物としてのリンネル—金や銀に、といっても事態は何ら変わらない—に関連づけるとき、彼らにとっては、彼らのこの私的諸労働の社会的総労働への関連が、まさしく当の錯乱した形態で現象しているのである。」(63から64頁)

マルクスが述べているように商品は形而上学的小理屈や神学的意地悪さでいっぱいへんてこなものでした。マルクスはここでこのへんてこさについての指摘をしているように私には思われます。ところが廣松はここについて次のように解釈します。

「俗流的労働価値説によれば、そしてまた、マルクスの労働価値説に関する俗流的理解によれば、上衣や長靴などの商品は交換的等置にさいして『人間の抽象的労働の一般的体化物たるリンネル（金や銀といっても事態は変わらない）に関連づけられる』と思念されている。だがこのような思念は明白な『錯乱』だと言い切っているのである。……

それでは、真実態は如何？このような錯乱的現象形態で人々に仮現する真実態は何であるのか？マルクスの答えはこうである。『お互いに独立に営まれている・とはいえ社会的分業の自然的分枝として全面的に相互依存的な・私的諸労働』が『社会的総労働に対してもつ関連』がそれであり、この関連があつた錯乱的形態で人々に仮現するのである。」(64頁)

このような解釈は私からすれば、形而上学的小理屈や神学的意地悪さに廣松がからかわれてしまった帰結のように思われます。錯乱した現象形態とは錯乱しているものだから仮現だと考えたようですが、マルクスにとってはこれは仮象ではなくて現象形態です。そして廣松が「真実態」と述べている社会的総労働に対する関連がこの現象形態をとっているのです。だいたい俗流経済学者には、リンネルが人間の抽象的労働の体化物となっていることなど決して見抜けていません。これはリンネルという自然素材の使用価値が抽象的人間労働という一般的なものに化けているのですね。これぞまさに神学的意地悪の仕業なのです。廣松はさらに先に資本論から引用した文章に続いてマルクスが「このような諸形態こそが、まさしくブルジョア経済学のカテゴリーをなしている」(65頁)と述べている部分に依拠して、この錯乱した現象形態をブルジョア経済学のカテゴリーだと認定してしまうのです。しかしマルクスの記述に従えば、諸商品の共同的な貨幣表現としてある「商品世界の既成的形態」のほうがブルジョア経済学のカテゴリーをなしているもので、廣松はマルクスが価値形態の秘密を述べたところを逆にブルジョア経済学のカテゴリーだと錯認し取り違えてしまっている

のです。

3) 廣松の価値論解釈の問題点

廣松はマルクスが価値の実体を商品に対象化された労働と見なしていることについて、かの実体観に基づいて次のように、これを物象化的錯認と断定しています。

「真実には商品の内部に価値なるものが実体相で実在しているわけではなく、抽象的人間労働なるものが凝固的に対象化するわけでもない。交換的等置の場における価値量や価値形態の基底に立てられるものというかぎり、物象化された視界では、Substanz (=実体) としての価値実体が指定されるとはいえ、これとてその現実態においては『人と人との物を介しての関係』の『反照的規定』なのである。」(24頁)

実体とは個物についての規定だという廣松の先入観によって、形而上学的実体としてマルクスが価値の実体を社会的実体という関係的なものとみなしていることへの理解が及んでいません。使用価値に抽象的人間労働が対象化されるということはまさに関係の内では起きる事柄で、抽象的で社会的なものである価値実体が個物に対象化することは錯認ではなくて価値の現象形態の帰結なのです。そして実体が個物に対象化するという事態を実現するためには、価値は価値形態を取らなければならないのです。ところが価値の実体である抽象的人間労働を個物としてある商品の属性と見なしてしまった廣松は、マルクスがあたかも「二商品の交換的等置における等質性、『同じ共通なもの』を『価値』と呼んできた」(31頁)という風に捉えています。マルクスは共通なものについては価値実体と見なして価値とは捉えていません。というのも、共通なものが価値であるなら、価値形態は不要になってしまうからです。実際に廣松は等価形態について次のように述べることで、価値形態の意義を見失っていることを告白しているのです。

「商品Aと商品Bとが同“質”者としての『価値』に還元され、さらには『価値実体』としての『抽象的人間労働』の凝固物に還元されているとは言っても、“絶対的価値”や“価値実体”の量が現前化しているわけではない。現象的に現前しているのは、『価値的等置』という事実までであり、この『等置』において、商品Bという現物が、それと同質同量たるかぎりでの商品Aの価値を表現しているのである。」(33頁)

ここで明らかなように廣松は価値実体としての抽象的人間労働の対象化ということ、端的に商品Bがそのような物として現象することとして捉えています。逆にここで廣松も述べているように価値形態にあっては商品Bの現物形態を抽象的人間労働の体化物とするというところに独自性があるわけです。だから具体的な物が幻のようなものの体化物に化けてしまうということに注目しなければなりません。ところが廣松

は自らの先入観に基づく実体観を払拭するのに精一杯で、この肝心要の価値形態の秘密には気づいてはいないのです。そしてこの価値形態の秘密を解明することなしには、人々の社会的関係の独自性を明らかにすることはできないのです。ということで次には廣松の「関係主義」に基づいて研究している飯田和人の議論を一瞥しておきましょう。というのも廣松関係論の弱点がそこに拡大されて表れているからです。

第2章 飯田和人の関係主義的価値論

飯田和人の『市場経済と価値』(ナカニシヤ出版)にざっと目を通してみました。なかなか緻密な議論をしていますが、二つ三つの穴が開いていて、せっかくの作業も実を結んではないように思われます。幾つかの疑問について書いてみます。

1) 関係主義的価値論とは

飯田は関係主義的価値論の前提に、価値を呪物性として捉えます。

「呪物性としての価値とは、まず結論からさきにいえば、資本主義・市場・市場経済を構成する人々の独自の社会的関係が、この人々の意識に商品、貨幣、資本といった諸物(=経済的諸範疇)のもつ呪物的性格として反映されたものである。」(9頁)

これはつまり、商品や貨幣や資本の価値対象性が、人間の意識に反映される限りでのものを「呪物性としての価値」と定義し、これを関係主義的価値論と名づけているのですが、その根底には実体主義的価値論との対比ということがあります。

しかしマルクスの実体概念は、飯田自身が別のところで認めているように、変化の底にあって不変のものであり、実体=主体ともみなしうるもの(356頁)ですから、実体とは関係を解明していく際のキー概念だったはずですが、そうだとすれば、飯田にとって必要だったのは実体主義的価値論といってくくられている通説とされている理論そのものの批判だったのではないのでしょうか。そうしないと、逆に飯田は実体主義的価値論自体をそれとして認めていることになってしまいます。これが第一の穴です。

実体主義的価値論の通説的理論をそれとして認めてしまった結果、飯田の関係主義的価値論は、物象についての理論ではなくて、物象についての人間の自然発生的な意識とされてしまいます。「呪物性としての価値」とは人間の価値意識だということになれば、それがひとつの客体的な存在としてあるものではなくなくなってしまいます。

2) 諸人格の社会的関係とは

にもかかわらず、飯田にとっては関係主義的価値論とは「諸人格の社会的関係」として客体的なものとみなされているようです。その理由は諸物象の関係のほかに諸人格の関係があるかのように思い込んでいることにあるようです。飯田は次のように述べています。

「商品世界は、諸物象の社会的関係と諸人格の社会的関係との2つの関係の相互依存かつ転倒的な空間として概念的に把握される。」(296頁)

「物象と人格との相互依存かつ転倒的關係からなる商品世界(広義)は、人間の意識と密接に関わる呪物崇拜をその重要な構成要素にしている。」(301頁)

マルクスは諸人格の社会的関係が物象相互の社会的関係としてであると述べていると私には思われるし、だから商品は単なる物ではなくして物象と規定されているのです。ここには2つの関係があるのではなくて1つの関係しかないのではないのでしょうか。ところが廣松の「関係主義」に煩わされて、飯田も廣松同様に、観念的なものを物に取り付いた超感覚的なものとしてではなく、独立自存した事物として感覚の対象と見なしているように思われます。

3) 価値表現の主体は人間なのか

広義の商品世界に2つの関係を見る飯田は価値表現にも2つの主体を見出します。

「よく知られているように価値形態論の主語＝主体は商品である。無論、そこで人間の存在が無視されているのではない。価値表現の主体は人間であり、この存在なしに価値形態の形成そのものがありえないからである。」(317頁)

マルクスは商品所有者を商品の番人であることは認めましたが、彼を価値表現の主体としていたわけではないでしょう。あくまでも彼の商品が価値表現の主体だったはずで、飯田の言いたいことは商品所有者たちが「それぞれ所持する商品の価値を貨幣で表現しようとする。彼らは呪物崇拜の主体であることによって、はじめて価値表現の主体たりうるのである」(317頁)というように商品の価格付けを価値表現とみなしていますが、これでは物象に支配されているという現実が見えなくなってしまう。商品所有者は価格をつける際に主体的に行動できるわけではないからです。

4) 「自己関係」論の独り歩き

飯田はマルクスの価値形態論の特徴をそれが「自己関係」論であるところに求めています。そして自己関係についての論理を次のようにまとめています。

「自己関係とは、他者に関係することによって自分と関係することであり、それをおして自分の自立性を確証するような反省関係のことであった。この反省関係は、

たんに相互依存的な関係というのではなく、主体の運動(反省運動)をとおして成立する関係である。」(299頁)

自己関係とはキルケゴールの人間論であり、精神論ですが、飯田流の呪物性としての価値つまり人間の価値意識には妥当するかもしれませんが。しかし商品は人間の意思を支配する神的なものですからそれを自己関係とは見なせないでしょう。商品の価値関係は人間の自己関係ではなく社会関係に他なりません。ついでに言えば人間の精神もキルケゴールのように自己関係と見るのではなく社会関係として見る必要があるでしょう。

5) 信用論抜きの「現代貨幣」論

飯田は現在の不換銀行券を単なる価値標章とみなして次のように述べています。

「現代貨幣たる紙幣(＝価値標章)は実体的価値をもつ金属貨幣の代理物として理論的には位置づけられる。事実マルクスもそうしており、これを仮に『紙幣＝金属貨幣の代理物』説と名づけておこう。」(312頁)

ここでの飯田の断言とは逆に、マルクスは国家紙幣に関しては価値標章とみなしましたが銀行券については信用貨幣として、別のものとみなしています。現代の貨幣は銀行券であって、国家紙幣ではありません。飯田が「現代貨幣」を価値標章というのなら、不換銀行券が国家紙幣であることを証明する必要があるし、預金通貨などの信用貨幣をどう見るのかについての見解を開陳すべきです。そして資本についての関係主義的価値論を考えるのなら当然にも資本市場(金融市場)をテーマとすべきでしょう。これが最大の大穴ですね。

現場から

今回はこの間の活動報告をしておきます。

1) 11月28日のフォーラム「21世紀の社会的経済を展望するために一連帯する社会的企業をつくりだそう」報告

会場はエル大阪で、第一部の「実践者によるパネルディスカッション」は定員90名の連合大阪の会議室を満室にし、第二部「T・ジャンテ氏講演とセッション」も170名でもたれ、興行的には大成功でした。延べ200名の参加者の主力は近畿ろうきん40名余、自治労40名、平和人権センター20名、共同連15名、日本スローワーク協会10名、パラマウント10名で、その他NPO関係者65名といったところでしょうか。

前日行われた東京フォーラムも参加者 200 名で成功裏に終わったとのことでした。東京がシンクタンクや諸団体の全国的指導部や学者・知識人を中心とした集まりだったのに対して、大阪は地べたを這って活動している団体がパネリストだったことで、特色が出て非常によかったと仕掛人の柏井さんが語ってくれました。

フォーラムの内容については後日報告集が出されますので今回は省略します。実行委員会はこの成功を踏まえて、活動を持続させることになりました。今回は準備が急であったのでNPO関係者への周知が徹底しませんでした。いずれ実行委員会で、NPO中心のイベントが企画できればいいと考えています。

2) スピノザ研究会などの研究活動の報告

毎月の研究会は隔月での公開講座をはさんで実施されています。10月のレーニンシンポに続いて11月には中国文学の専門家である瀬戸宏さん(阪南大学教授)をお招きして「不条理劇は文革後中国でどう受容されたか—『ゴドーを待ちながら』を中心に」というテーマでお話していただきました。社会主義的リアリズムからは反動的な文学と見なされてきた不条理劇(あらすじや会話に筋道のない演劇)が文革後の中国で、最初はアンガラ劇として上演されていたのが次第に公認されて、やがて国家の劇場で上演されるようになっていく過程で、劇の演出がどう変わっていったのか、ということについてビデオを見ながらのお話でした。最初のアンガラ劇は体制に対しての不満をぶちまけるようなものでしたが、国立劇場での上演は宝塚風の演出でとてもお洒落にできあがっていました。

なお瀬戸さんには専門の現代中国の演劇についての著書がありますので紹介しておきます。

* 『中国演劇の二十世紀 中国話劇史概況』 (東方書店、1999年)

* 『中国の同時代演劇』 (好文出版、1991年)

* 『中国話劇成立史研究』 (東方書店、2005年)

10月のスピノザ研究会は私のライブニッツ論の報告とIさんの『はじまりのレーニン』の報告がありました。ライブニッツ論はASSB誌掲載のものです。このときの報告で私の形而上学病はドンドン進行し、今回のように商品価値の形而上学的、神学的構成、という見地にたどり着きました。ここからは世界がまったく新しいものとして見えてきそうです。

スピノザ研究会から派生した資本論カフェも毎月1回の読みあわせをやっています。以前に資本論の講義をテープにして発売したことがありますが、そのテープ起こしも始まり、これと研究会の議論をあわせて出版物の作成を構想しています。商品の

形而上学的、神学的構成について理解できたことで、面白いものができそうです。

12月はスピノザ研究会、1月は公開講座ですが、1月は22日(日)午後1時から、京大会館で、連合大阪で活動してこられた要さんをお招きして、久しぶりに労働運動についてのお話です。

3) 市民文化講座の報告

市民文化講座は隔月実施ですが11月に9回目の講座を持ちました。カフェ commons の石ガマの燃料が木質ペレット燃料だったことで、これを製造している大阪府森林組合の三島支店から都解さん、高槻市都市産業部から宮田さんにきていただいて面白いお話をしていただきました。この日の朝日の朝刊に講座のことが出たこともあって20名の参加者でにぎわいました。市の職員の方の参加もありました。スローワーク協会というNPOが経営するカフェで、手作りの石ガマで木質ペレット燃料でパンやピザを焼くという話題性の豊富な場ができたことで、行政の方も注目しているようです。私としては里山保全の活動を高槻市ではじめることを構想しており、その第一歩が踏み出せたという感じです。それで1月の講座は28日にマツタケ博士の吉村文彦さんをお招きして里山保全について話していただくことになりました。

4) 三団体の運営の報告

ニュースタート事務局関西がらみの三団体の運営について、この2年は三団体運営会議で事業を行ってきましたが、NPO法人日本スローワーク協会がたちあがり、関係事業もこの協会が中心になってきましたので、日本スローワーク協会中心の運営へと体制の変更を行うことになりました。これに伴い、私が関わっているNPO法人ワーカーズ・コレクティブ・サポートセンターの改組を進めていくことにしています。

サポートセンターはこれまでニュースタート事務局関西関連の事業の協同組合化をサポートしてきましたが、一定の成果が上がりましたので、別の活動分野を開拓しようと考えているのです。基本的な活動方針を定めた上で、新たに会員を増やし、役員の交代も視野に入れていきます。具体化にはいまま少し時間が必要です。

後記

この間スピノザやライプニッツの形而上学に接してみた後、資本論の読み合わせに参加したことで、商品の価値形態の形而上学的、神学的構成に気づきました。これは単なるイデオロギーではなくて、存在そのものの構成としてあるのです。商品論の形而上学的、神学的構成について意識したのは中沢新一が初めてではないでしょうか。『はじまりのレーニン』第5章「聖霊による資本論」がそれで、この論文を書いている途中でスピノザ研究会でIさんから紹介があって、読み直しました。色々疑問点もありますがなかなか面白かったです。ぜひ中沢の本も参照して下さい。あと『環』3号に掲載されている鈴木一策「貨幣の魔力—マルクスのトラウマ」も参照してください。ただし鈴木は商品の形而上学的、神学的構成をマルクスの思考にひきつけて捉えて、これをマルクスの思考のオカルト的歪みとしていて、そこにマルクスのトラウマを指摘しているという点で、私の論文の趣旨とは違っています。

早いものでもう12月です。でも振り返ると今年もずいぶん長く感じています。モモの本が出たのが3月でしたが、もう何年も前のことのように感じています。ところで小泉が選挙で圧勝したことで、反って道筋がはっきりとしてきたように思います。やはり新自由主義に対するきちんとした批判と対抗的な実践が欠落していたのでしょうか。前号では「ケアレスマン」モデルの問題点と市場原理主義と国家の統治原則との違いについて触れましたが、次号ではもっと掘り下げて、新自由主義の問題点に迫ってみたいと考えています。

10月にカフェコモンズが開店しました。ビルの5階ということもあり、まだまだ地元の人たちの居場所にはなってはいません。当分イベントを入れていって集客していかなければなりません。ゆっくり座って30名、詰めれば40名でも入れます。忘年会や新年会を富田で企画してみてください。また一度店に寄ってみてください。眺めがよくて気持ちの良い空間です。

HPの方、担当者の都合で更新ができていませんでした。しかし年内には新しい体制で更新できるようにしていきます。ご期待下さい。